

意見

中 村 治

「古代末に知的文化が途絶えたわけではないが、知的であるはずの階級の知的レベルがひどく下がった。しかしアルクィヌスとその周辺の知的サークルには、自分たちなりに考えた形跡が見られ、それ以後、知的レベルが次第に上昇傾向に向かっていった。」という清水氏の指摘は、今や一般的に受け入れられているのではないかと思う。

わたしが知りたかったのは、アルクィヌス以後「論理学が学問の中心となっていったのはなぜか」という点である。ヴァッロ (B. C. 116-B. C. 27) 以後、ローマの紳士の教育に相当と思われるものとして文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽理論、医学、建築学があげられ、そこから医学と建築学が省略されて、七自由学芸として残るようになったようであるが、清水氏が指摘されたとおり、論理学が最も重要とされていたわけではなかったようである。ではなぜ論理学が中心となっていったのか。

一つの理由として考えられるのは、アウグスティヌスである。アルクィヌスおよびその知的サークルに属する者たちは、アウグスティヌスの著作の一つであると考えられていた『十の範疇』から学んだ概念について、なお一層の情報をアウグスティヌスの著作を通じて求めた。そして彼らを書いたものには、範疇に関するアウグスティヌスの吟味などの影響が見られる。

もう一つ考えられるのは、アリストテレスの論理学書を翻訳したポエティウスである。ポエティウスは、論理学は哲学のための道具にすぎないのではなく、哲学の一部であると考えていた。そして普遍が実在するのか、単なる概念にすぎないのかという問題、神による予知と人間の自由との両立性の問題のように、論理学書を読むことにおいて生じてくる哲学的論点のところで思案している。そのポエティウスの著作が9世紀前半以後、コルビーのラトラムヌスらによって読まれるようになったのであった。

このようにアウグスティヌスやポエティウスが保存され、読まれたことによって、中世初期の思想家たちに論理学への関心がかきたてられたとも考えられる。

しかし中世初期の思想家たちはなぜアウグスティヌスやポエティウスを好んで読も

うとしたのか。それは、彼らが神学的著作において合理的に説かれたテキストに対する好みを持っており、その好みは、アウグスティヌスやボエティウスから得られる論理学の知識によって刺激されたのではないであろうか。そのようなテキストへの好みは、中世初期に特有のものであり、そこに中世初期の独自性を見ることもできるであろう。

その独自性は、論理学に関する知識の深まりとともに、強化されていったように思われる。アルクィヌスの時代、論理学に関する最も重要な著作は、偽アウグスティヌスの『十の範疇』であった。11世紀初めまでに、『範疇論』も『命題論』もボエティウスによる翻訳を用いて研究されるようになり、『十の範疇』への関心は、薄れていく。そしてアリストテレスの学説の理解に注意が集中されていくようになった。しかし論理学を神学に適用するということは、13世紀になると「はたして論理学をどこまで神学に適用できるのか」という問題を引き起こすことになると思われる。

このような意味において、「論理学が学問の中心となっていったのはなぜか」という問題は、中世哲学史を理解するうえで、きわめて大きな意味を持っているのではないであろうか。では中世初期の思想家たちは、神学的著作において合理的に説かれたテキストに対する好みをなぜ持っていたのか。いつか考えてみたい問題である。

意見

宮本 久雄

「古代末期からカロリング・ルネッサンスへ」という歴史的テーマの背後には副題「知の断絶か連続か」が伏在しており、時代の上限をボエティウスにとりそこから下限をカロリング王朝の成立・展開期にとって実に精緻な提題の解釈がなされた。その場合一体ここで問われる知とはどのような理性的・ロゴスの営みののだろうかということが問題になる。もしこの知の性格を自然科学的知の意味にとれば、前述のテーマにあって知は歴史と共に進歩してゆく理性的営為ということになり、その結果知の断絶よりも連続の方が発展として積極的に理解されよう。さて哲学的知の場合そうした理解でよいのだろうか。

また、テーマの知の意味が、従来中世哲学史的に知られていない研究動向の交流や